「心の四季」をうたうにあたって　その６

６．「雪の日に」

第３曲の「流れ」と同じ８分の 12 拍子だが、そもそも短調であるし、作曲者の速さ指示は「流れ」の 120（符点４分音符=）に対して 76 の指示があり「流れ」とは趣を異とする。

髙田三郎の要求は、まず『重さ』にある。それは雪の重さであり人間の運命の重さにも通じる。次に『持続』…吉野弘が「東北地方の雪は、おさえきれない人間の精神のように、はげしく、いつまでもふりつづける」と語ったことを髙田三郎は覚えていた。この曲に表される *f*（ﾌｫﾙﾃ）がその『持続』であり cresc.も decrec.も精神的持続力が必要だと訴える。

つまり１曲目の「風が」で触れたようにここで言う *f* は単に音量を指しているのではなく、それは『重さ』であり『持続』する力なのである。

『どこに純白な心などあろう　どこに汚れぬ雪などあろう』

純白な心の持ち主にはこの歌詞は歌えない！という笑い話がある。吉野弘にとって人は汚れていてそれを隠そうとすること、欺かないで生きようとすることがみずからの手に負えなくなった存在だと言い切る。そして、純白な雪もまたその餌食となるかのように降り積もっていくのだと。そこには悲愴しかないか…？

冒頭ソプラノの１拍目と３拍目だけを辿っていくと♪ﾄﾞｼﾗ ｼﾗｿ ﾗｿﾌｧ ｿﾌｧﾐ ﾌｧﾐﾚ…とまるでチャイコフスキーの交響曲第６番・悲愴の最終楽章を思わせる下降音型である。髙田三郎にも悲愴しか無いのか？ いや決してそうではないということを、この曲を、優しさの象徴であるヘ長調で終わらせた髙田三郎自身が証明しているではないか。

７．「真昼の星」

この曲は、その２で触れたように、不完全な人間界のリズムと完全なる自然界のリズムとが融合して昇華していく組曲の終曲に相応しい賛美歌のような佇まいを見せている。

４パートの強弱と拍の運びが最後までシンクロして外れることを許さないこの制約の中で、私達はどれだけ美しく歌い上げられるだろうか。しかしその中で一度だけ流れが外れるテナーの上行音型(♪かがやきを、の一節）に充分な開放感を味わいたい。そして後奏のピアノに全てが昇華していく余韻を味わいたいものだ。

最後に、この組曲を象徴する言葉で「心の四季を歌うにあたって」を閉じることにする。

『人間は、その不完全を許容しつつ、愛し合うことです』 吉野弘

T.Ozaki

2017/05/25